

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370445

研究課題名(和文)現代スィンディー語の統語的・形態的变化に関する研究

研究課題名(英文)Research on the syntax and morphology of Sindhi

研究代表者

萬宮 健策(Mamiya, Kensaku)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：00403204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：現代インド・アーリヤ諸語の1つである、スィンディー語を、通用地域であるインド、パキスタンの方言差にも留意しつつ、その体言修飾、用言修飾構造の観点から見つめ直すことを研究の中心とした。その成果は、国立国語研究所が中心となって進めているプロジェクトで研究発表、および論集刊行という形で公開された。

この研究は、他の近隣言語に比べて文法上の古い形(女性複数の変化など)を残すスィンディー語を通して、現代インド・アーリヤ諸語の歴史的な変化の一端を明らかにすることにつながるものである。それだけでなく、スィンディー語話者の言語アイデンティティについても、表記する文字にこだわらないことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research focused on the morphological and syntactic change of Sindhi language, which is mainly spoken in Pakistan and India. Especially I have found the participle "waaaro" is important role in the noun phrase structure of the Sindhi. On the other hand, the Sindhi language has been one of the cores of their identity. But it became clear that the written language is NOT important for them as the part of their identity, but living verbal language is the most important for them. The language is the important part of the identity of the South Asian people. This research is the beginning of the identity studies, which will be one of main part of the applicant's research in the coming years.

研究分野：言語学

キーワード：スィンディー語 統語論 形態論

1. 研究開始当初の背景

現代シンディー語には多くの英語語彙が含まれるが、それらの借用語には音韻・音節レベルでの変化が観察できる。英語が閉音節言語であるのに対し、シンディー語は開音節言語であること、両者の音韻体系が異なることなどが主な理由であるが、ウルドゥー語は英語と同じ閉音節言語であるため、シンディー語ほどの変化はみられない。この研究成果は、留学先大学に M.Phil 学位取得論文「ウルドゥー語とシンディー語の音節構造比較研究」として提出した。その後も文献研究と現地調査を継続し、平成 19~21 年度の「シンディー語を取り巻く言語事情に関する研究」(挑戦的萌芽研究)を経てシンディー語文法書を完成させ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催夏季言語研修テキストとして刊行した。この言語研修に際してインドから招聘したシンディー語を母語とする初老のヒンドゥー男性の語りが、本研究の着想につながった。

彼によれば、故地シンドのシンディー語こそが母語であり、それは宗教の違いを超えて民族を統一するものである。従って、デーヴァナーガリー文字で表記されたシンディー語は母語ではない。ヒンドゥー教徒であっても、アラビア文字のシンディー語を使うことこそが、異郷においてシンディー文化を維持する最も正統的な手段である。

申請者は、第一言語の影響を受けて変化した移民のシンディー語も、当事者がそれを母語ないしシンディー語と主張する限りシンディー語と捉え、調査研究の対象とする。このため、一般的な基礎語彙ではなく、民族アイデンティティに直結した民族的慣習との関連が深い特殊な民族語彙を重視し、言語調査を実施する。移民・ディアスポラ社会において変容しつつある文法・語彙も射程に入れた現代シンディー語の研究は、移民・ディアスポラ第 1 世代が高齢化している現在、早急に取り組むべき課題として、本申請者は位置づけている。

2. 研究の目的

本研究では、少数民族や移民・ディアスポラにとって民族アイデンティティの中核に位置づけられてきた母語が、主流社会の政治経済的・文化社会的な環境に応じて統語的・形態的な変化を来す点に着目し、言語政策・教育行政だけでなく儀礼・信仰・婚姻・贈与などの「民族的慣習」も視野に入れ、系統的かつ網羅的な言語調査を実施する。具体的には、多数派言語としてのシンド州(パキスタン)のシンディー語と少数派言語としてのマハーラーシュトラ州(インド)のシンディー語の比較分析から出発し、分析結果を世界各地のシンディー・ディアスポラ社会の言語状況と対照する。母語と第一言語が異なる移民・ディアスポラの側から、故地のシンディー語を逆照射することで、現代

シンディー語の文法・語彙の諸特性を捉え直す。

3. 研究の方法

平成 26 年度は、1) これまでに蓄積されているデータの再分類および分析、2) アメリカおよびイギリスに居住するディアスポラ・シンディーからの新たなデータ収集、3) 日本国内(主として神戸及び横浜)に居住するシンディーを対象としたデータ収集、聞き取り調査を実施する。

平成 27 年度は、平成 26 年度の 1) 2) 3) の調査を踏まえ、インドにおけるシンディー多住地域のうち、グジャラート州、西ベンガル州、デリー首都圏でのデータ収集、検証を行う予定である。また、パキスタンにおいても上記で収集されたデータを踏まえた補充調査を実施する。

平成 28 年度は、インドでの最終的な補充調査を実施し、得られた成果を学術論文としてまとめるとともに、学会での口頭発表を通じての成果公開を行う。また、3年間を通じてウェブサイト上に処理済みデータを公開し、世界中のシンディー語話者に対し継続的に発信する。

平成 29 年度は、3年間で蓄積されたデータ分析から得られた知見を確認する作業を実施するため、期間延長申請を行ったことを付け加えておく。

4. 研究成果

本研究は、最終的に 1 年間の延長申請を行い、計 4 年間の研究となった。3 年間の当初期間中に新たな関心事項が増えたため、その調査に時間を要すると判断したためである。

期間中の主な成果は、以下 5. 主な発表論文等に掲載したとおり、図書 5 件と、学会発表 5 件に集約されている。ここで、主な業績について、述べておく。

なお、計画時に予定していた研究のうち、アメリカにおけるディアスポラの研究については、知人の紹介のタイミング等の関係で、北歐ノルウェーにおける調査に変更となった。

学会発表では、2015 年度にパキスタンで開催された学会において、英語による口頭発表を実施した。ここでは、パキスタンにおけるシンディー語話者の社会的地位に関する状況とともに、国立国語研究所が中心となって進めている研究に参加したこともあり、シンディー語における体言修飾、用言修飾についての状況をまとめて報告した。

シンディー語では、分詞 *waaro* が多用されているだけでなく、動詞の未完了分詞、完了分詞が形容詞的な働きをすることで、さまざまな修飾表現を実現していることがわかってきている。文献からの例文及び学会参加者の中のシンディー語話者との意見交換等から 2016 年以降に行った研究発表につながる知見を得ることができた。シンディー

語では、同じ現代インド・アーリア諸語に属するウルドゥー語やヒンディー語では見られない修飾表現が見られ、マラーティー語に近い表現がいくつかあることもわかり始めてきている。

2017年度中に実施した学会発表は、上記を受けて、研究を進めた成果の一部を含んでいる。つまり、分詞 *waaro* の用法をより細かく分析し、例文を挙げつつ、ウルドゥー語の *waalaa* とも比較しながら、その特徴を明らかにした。すなわち、いわゆる「外の関係」には用いられないことが明確となった。

なお、以下の業績には含まれていないが、2018年度中に刊行予定の図書『日本語と世界の言語の名詞修飾表現(仮題)』(ひつじ書房)にも、シンディー語の名詞修飾の特徴を扱った研究論文の掲載が決定していることを付け加えておく。

研究期間中に刊行された図書については、直接本研究の成果をまとめたもの(2015年、くろしお出版)以外にも、社会言語学的な観点から、シンディー語話者の実態をあぶり出したものも含まれる。

中でも、『言語問題とアイデンティティ』(東京大学出版会)では、パキスタンからインドへ移住したシンディー語話者(ヒンドゥー教徒)の語りをもとに、いわゆる言語州を形成していないシンディー語がインド国内でどのような立場におかれ、それを彼ら自身がどう考えているのか、という点を論じたものである。

歴史的に、シンディー語は現パキスタンのシンド州を中心とした地域で話されていた言語だが、印パ分離独立を機に、ヒンドゥー教徒はインド側へ移住した。数百万単位のシンディー語話者も含まれていたが、1950年代以降のいわゆる言語州再編の波に乗れず、現在まで、インドにおけるシンディー語の地位は、インド憲法第八附則にその名前が挙がっているのみに留まっている。シンディー語は、彼らのアイデンティティの核として機能しているが、それは、アラビア文字で書くパキスタン側にそのルーツを有するシンディー語という訳ではないことが、本申請者がインタビューをとおして得られた成果の中心であった。

本研究の核として、シンディー語の言語学的側面を捉え直すという点を挙げたが、それと同時に、シンディー・ディアスポラの言語状況を探るという点も、重要なテーマとして位置づけた。この点は、今後のインド人、パキスタン人移民の言語状況を研究していく上で、比較対象としても有益であると考え、ノルウェーに移民として居住しているパキスタン出身者からもデータ収集を実施した。

ノルウェーでは、就職の際にノルウェー語の運用能力を求められるため、社会生活ではシンディー語を用いる機会は非常に限定的となる。このような環境では、移民一世はともかく、二世以降はシンディー語への関

心を保持することは困難である。シンディー語に限らず、世界各地に居住する南アジア出身者の言語アイデンティティは、今後の研究テーマの1つとする予定である。本申請者は、ウルドゥー語も主たる研究対象としており、イギリスやアメリカ、オーストラリアなど、各地での社会言語学的調査を将来的に実施したいと考えている。本研究は、その研究へのステップとしても貴重であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計5件)

- (1) 萬宮健策、『シンディー語における名詞修飾の特徴』, *Luncheon Linguistics*, 東京外国語大学語学研究所, 口頭(一般), 東京外国語大学, 2017年
- (2) 萬宮健策、『シンディー語における名詞修飾の実際』, 文法研究班「名詞修飾表現」平成29年度第2回研究発表会, 国立国語研究所, 口頭(一般), 富山大学, 2017年
- (3) 萬宮健策、『シンディー語動詞構造再考～受動動詞の観点から～』, 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第18回研究会, 口頭(一般), 東京外国語大学, 2016年
- (4) 萬宮健策、『言語アイデンティティの実際～シンディー語の事例から～』, 日本南アジア学会第28回全国大会, 日本南アジア学会, シンポジウム・ワークショップ パネル(公募), 東京大学駒場キャンパス, 2015年

- (5) MAMIYA Kensaku, “Status of Sindhi language in India in comparison to Pakistan”, The 2nd Kashmir International Conference on Linguistics, International conference, Institute of Linguistics, University of Azad Jammu & Kashmir, University of Azad Jammu & Kashmir, 2015

〔図書〕(計4件)

- (1) MAMIYA Kensaku, “The status of Sindhi language in India”, *Idara Maaruf-e Islami*, Karachi, 単著, 2016年
- (2) 萬宮健策、『アキール・コレクションにおけるシンディー語資料』, 『イスラーム世界研究』, 京都大学イスラーム地域研究センター, 単著, 2016年
- (3) 萬宮健策、『シンディー語の動詞派生』(バルデン・プラシャント、桐生和幸、ナロック・ハイコ編「有対動詞の通言語的研究: 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの」所収, くろしお出版, 単著, 2015年

- (4) 萬宮健策、『言語問題とアイデンティティ -シンディー語の事例から』（粟屋利江、井坂理穂、井上貴子編 「現代インド5 周縁からの声」所収）、東京大学出版会、単著、2015年

〔その他〕

ホームページ等

http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/mamiya_k/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

萬宮 健策 (MAMIYA, kensaku)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：00403204